



「特集」に寄せて

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
准教授 山腰 修三

大衆社会論を理論的基盤として展開してきたマス・コミュニケーション研究、メディア研究、ジャーナリズム研究において、「マス」概念はその中核に位置づけられてきた。しかし、メディア環境および政治社会状況の変化に伴い、「マス」概念の中心的な参照点としての地位が揺らいできた。近年の「メディア・スタディーズ (media studies)」という当該研究領域を指し示す呼称はむしろ、「マス」概念を積極的に除外しようとしているようにすら見受けられる。だが、果たして「マス」概念はその使命を終えたと評価することができるのだろうか。本特集では「マス」概念のこれまでの位置づけの変遷を辿るとともに政治理論や社会理論を積極的に参照しつつ、メディア研究、マス・コミュニケーション研究における「マス」概念の再評価を試みている。

津田論文は、大衆社会をめぐる論争、そして大衆社会においてメディアが果たす役割をめぐる先行研究を整理し、それを踏まえ、今日の「大衆なき社会」ともいえる状況におけるメディア・コミュニケーション研究の可能性を論じている。

山腰論文は、政治的主体の構築性をめぐる批判的コミュニケーション論の分析枠組みを再検討しつつ、ポピュリズム政治の今日的展開、そしてそこでメディアが果たす機能を分析する上で「マス」概念を参照することの意義を論じている。

山口論文は、構築主義的な視点から、「ジャーナリズム」そのものが今日のメディア環境においてどのように論じられているのかを検討し、そのうえで、「ジャーナリズム論」が依拠してきた「マス」概念について批判的な見解を提示している。

平井論文は、インターネットの利用状況が「大衆化」してきた点に注目する。そして今日の「オンライン・コミュニティ」を分析するうえで、大衆社会とその変容を論じてきた都市社会学の知見を活かすことが有用であると論じている。

新嶋論文は、ポピュリズムに代表されるマジョリティが不満を訴えるようになった状況を「マス」概念を意識しつつ分析している。とくにアメリカ社会における「バックラッシュ」現象の歴史的変容過程を踏まえ、そうした動向が今日の政治状況をどのように形成してきたのかを論じている。

本特集は研究プロジェクトのいわば中間報告である。今後は本特集で得られた知見をもとに、他のプロジェクト・メンバーも加えつつ議論を洗練化させ、最終的な研究成果を世に問うこととしたい。